ことわざ 一覧表（早見表）

小学生～中学・大人／覚えておきたいことわざと意味のまとめ

「糠に釘」
やわらかい糠に釘を打つように、いくら言っても手ごたえがなく効き目がないこと

「虎に翼」
強大な力を持つ者に、さらに強い味方が加わって無敵になること

「一日の長」
経験や知識、わざなどが、ほかの人より少しすぐれていること。もとは、年が少し上であること

「三顧の礼」
目上の人が目下の人を何度も訪ねて敬意を表し、仲間に加わってもらうこと

「両刃の剣」
大きな利益をもたらす可能性がある反面、大きな害をもたらす危険もあること

「他山の石」
他人のまちがった行いやつまらない言動でも、自分を正したりみがいたりする助けになるということ

「住めば都」
どんな場所でも、住み慣れてしまえば居心地が良く感じられるものだ

「君子豹変」
君子は過ちを認め、潔く改めることで立派な姿に変わること

「唇亡歯寒」
互いに助け合う関係の一方が滅びると、他方も危うくなること

「善は急げ」
良いことだと思ったら、ためらわずにすぐ実行すべきだ

「塞翁が馬」
人生の幸・不幸は予測できず、変化しやすいものだ

「寝耳に水」
思いがけない知らせを聞いて、とてもおどろくこと

「後の祭り」
時期を逃してしまい、手遅れであること

「忠言逆耳」
真心を込めた忠告は、聞く側にとっては耳が痛く反発したくなるものだ

「沈黙は金」
上手に話すことも大切だが、だまっているべきときにだまっていることは、それ以上に大切だということ

「河童の屁」
取るに足りないこと、何でもないことのたとえ。「屁の河童」とも言う

「漁夫の利」
両者が争っている隙に、第三者が利益をさらうこと

「牛刀割鶏」
小さなことを処理するのに、大げさな手段を用いること

「犬馬の労」
目上の人やほかの人のために、力をつくして働くことを、へりくだって言う言葉。「犬馬の労をとる」と使う

「猫に小判」
どんなに値打ちのあるものでも、そのよさがわからない人にはむだであること

「瓜田李下」
人に疑われるような紛らわしい行いは避けるべきだ

「竹馬の友」
幼い頃から親しく付き合っている友人

「羊質虎皮」
外見は立派だが、中身が伴っていないことのたとえ

「老馬の智」
経験を積んだ者は、優れた知恵を持っているということ

「胡蝶の夢」
現実と夢の区別がつかないことや、人生の儚さのたとえ

「蛍雪の功」
苦労して学問に励み、成功すること

「蟷螂の斧」
弱い者が、自分の力を考えずに強い者に立ち向かうこと

「豚に真珠」
価値のわからない者に貴重なものを与えても無駄であること

「雨後の筍」
似たような物事が次々と現れることのたとえ

「雲を掴む」
実体がなく、とらえどころがないこと

「青菜に塩」
元気をなくして、しょんぼりしているようす

「風樹の嘆」
親が生きているうちに孝行を尽くせなかった悲しみ

「餅は餅屋」
何事もその道の専門家に任せるのが一番良いということ

「鬼に金棒」
もともと強い者が、さらに強い武器を持って無敵になること

いちごドリル プリント

ことわざ 一覧表（早見表）

小学生〜中学・大人／覚えておきたいことわざと意味のまとめ

「鶴の一声」
大勢で決まらないことも、力のある人の一言ですぐに決まること

「一寸先は闇」
将来のことは全く予測できないということ

「五十歩百歩」
程度の差はあれ、本質的には大差がないこと

「勝てば官軍」
どんな手段を使っても、勝った者が正義となり、権力を握るということ

「千慮の一失」
知恵者でも、時には失敗することがあるということ

「同じ穴の狢」
関係がないように見えても、じつは同じ仲間であること。ふつう、悪いことをする者どうしについて言う

「呉下の阿蒙」
学問や進歩がなく、昔のままの未熟な者

「多芸は無芸」
多くの芸事をつまみ食いする者は、結局どれも中途半端で極められないということ

「忙中閑あり」
どんなに忙しいときでも、ほっとひと息つけるわずかなひまはあるものだということ

「急がば回れ」
急ぐときほど、かえって遠回りのように見えても確実な方法をとるほうが結果的に早い

「月夜に提灯」
明るい月夜に提灯を下げても無駄であるように、不必要なことのたとえ

「氷山の一角」
全体のごく一部が表面に現れているにすぎないこと

「濡れ手で粟」
苦労せずに思いがけず利益を得ること

「灯台下暗し」
身近なことは、かえって気づきにくいということ

「無くて七癖」
どんな人にも、多かれ少なかれ癖があるものだ

「焼け石に水」
わずかな助けや努力では、ほとんど効き目がないこと

「狐の嫁入り」
晴れているのに雨が降ること（天気雨）。また、夜の山や野原に、きつね火が行列のように並んで見えること

「瓢箪から駒」
意外なところから意外なものが出ることのたとえ

「画餅に帰す」
計画や努力が何の役にも立たず、無駄になること

「眼鏡に適う」
目上の人から高く評価され、気に入られること

「知らぬが仏」
知らないでいれば、心穏やかでいられるということ

「短気は損気」
短気を起こすと、結局は自分自身が損をするということ

「破竹の勢い」
猛烈な勢いで突き進み、止めることができない様子

「紺屋の白袴」
他人の仕事に忙しくて、自分のことや身内まで手が回らないこと

「腐っても鯛」
優れたものは、たとえ落ちぶれてもそれなりの価値や品格を保っていること

「花より団子」
風流や見た目よりも、実質的な利益や実用性を重んじること

「虻蜂取らず」
二つのものを同時に得ようとして、結局どちらも得られないこと

「蛇の道は蛇」
同じ仲間のすることは、仲間どうしならすぐにわかるということ

「蛙の子は蛙」
子は親に似るもので、親と同じような人になるということ

「言わぬが花」
はっきり口に出して言わないほうが、かえって味わいがあり、さしさわりもないということ

「論より証拠」
あれこれ議論するよりも、実際の証拠を示すほうが確実だということ

「釈迦に説法」
自分より優れた人に教えを説く愚かさ

「馬脚を現す」
隠していた本性や悪事が露見すること

「鯉の滝登り」
立身出世のたとえ

いちごドリル プリント

「鶏群の一鶴」
多くの凡人の中に、一人だけ際立って優れた人物がいること

「七転び八起き」
何度失敗しても、くじけずに立ち上がって努力すること

「三度目の正直」
一度目、二度目は失敗しても、三度目はうまくいくということ

「下手の横好き」
下手なのに、その物事を好んで熱心にすること

「二階から目薬」
思うようにならず、もどかしいこと。また、回りくどくて効き目がないこと

「六十の手習い」
高齢になってから新しいことを学び始めること

「医者の不養生」
病気を治す専門家なのに、自分自身の健康には無頓着であること

「口は災いの元」
うっかり言った一言が原因で、大きな失敗や災難を招くことがある

「同病相憐れむ」
同じ悩みや苦しみを持つ者は互いに同情し合うものだ

「名は体を表す」
名前は、そのものの中身や性質をよく表しているということ

「嘘から出た実」
嘘のつもりで言ったことが、結果として本当のことになること

「夜討ち朝駆け」
もとは、夜に敵をおそい、朝早く攻めこむこと。今は、新聞記者などが、夜おそくや朝早くに、前もって知らせずに取材先をたずねること

「寸鉄人を刺す」
短くてするどい言葉で、相手のいちばん痛いところをつくこと

「弁慶の泣き所」
弁慶のような強い人でも、ぶつけると泣くほど痛い向こうずねのこと。また、強い人がもっている、ただ一つの弱点

「愚公山を移す」
どんなに困難なことでも、根気よく努力を続ければ必ず成就する

「提灯に釣り鐘」
形は似ていても、くらべものにならないほどちがうこと。つり合わないこと

「昔取った杵柄」
若いころに身につけた腕前は、年をとっても衰えないということ

「暖簾に腕押し」
力を入れても手ごたえがなく、張り合いがないこと

「月とすっぽん」
形は似ているが、質や価値が比べものにならないほど違う

「柳の下の泥鰌」
一度うまくいったからといって、二度目も同じようにうまくいくとは限らないということ

「柳は緑花は紅」
自然のままであることが最も美しく、ありのままが真実であること

「棚から牡丹餅」
思いがけない幸運が舞い込んでくること

「河童の川流れ」
その道に長けた人でも時には失敗することがある

「泣きっ面に蜂」
不運なことが重なって、さらに悪い状態になること

「濡れぬ先の傘」
失敗しないように、前もって用心しておくこと

「獅子身中の虫」
組織の内部にいながら害をなす者

「病膏肓に入る」
病気が重くなって治る見込みがなくなること。また、しゅみなどに夢中になりすぎて、やめられなくなること

「窮鼠猫を噛む」
追い詰められた弱者が、必死になって強者に反撃すること

「絵に描いた餅」
どんなに立派でも、実際には役に立たないこと。計画だけで実現しないこと

「継続は力なり」
何事もあきらめずに続けていけば、やがて成果となって現れるということ

「負けるが勝ち」
その場は相手に勝ちをゆずるほうが、結局は自分のためになるということ

「貧すれば鈍す」
生活が貧しくなると、心まで卑しくなり知恵も働かなくなる

「身から出た錆」
自分の行いが原因で、自分自身が苦しむことになること

「転ばぬ先の杖」
失敗してから後悔しないように、前もって準備や用心をしておくこと

ことわざ 一覧表（早見表）

小学生〜中学・大人／覚えておきたいことわざと意味のまとめ

「類は友を呼ぶ」
似た者同士は自然と集まりやすい

「馬の耳に念仏」
いくら意見を言っても、相手が聞き入れず効き目がないこと

「馬子にも衣装」
どんな人でも身なりを整えれば立派に見えるということ

「鬼の目にも涙」
冷酷な人でも、時には慈悲深い心や情けを見せることがあるということ

「鳴かず飛ばず」
長い間、何の活躍もせず機会を待っている状態

「鳶が鷹を生む」
平凡な親から、優れた子供が生まれること

「万緑叢中紅一点」
多くの緑の中に鮮やかな赤い花が一つ咲いているように、多くの男性の中に女性が一人混じっていること

「光陰矢のごとし」
月日が過ぎるのは矢のように非常に早いこと

「割れ鍋に綴じ蓋」
どんな人にも、その人に似合った相手がいるということ

「大は小を兼ねる」
大きいものは小さいものの代わりにもなるので、役に立つ

「寄らば大樹の陰」
たよるなら、力のある大きなものにたよるほうが安心だということ

「年寄りの冷や水」
高齢者が年齢にふさわしくない危険なことや無理なことをすること

「弘法も筆の誤り」
その道の達人であっても、時には失敗することがあるということ

「弱り目に祟り目」
不運なことが重なって、さらに悪い状態になること

「当たって砕けろ」
結果を恐れず、思い切ってやってみること

「後悔先に立たず」
してしまったことは、あとでくやんでも取り返しがつかないということ

「悪事千里を走る」
悪い行いや噂は、あっという間に世間に広まってしまう

「悪銭身につかず」
不正な手段で得た金は、すぐに使ってしまい残らない

「春宵一刻値千金」
春の夜のひとときは、千金にも値するほど趣深く貴重である

「春眠暁を覚えず」
春の夜は心地よく、夜が明けたことにも気づかず眠ってしまう

「果報は寝て待て」
幸運は焦らずに待っていればそのうちやってくる

「桃栗三年柿八年」
何事も成果が出るまでには、それ相応の時間がかかるということ

「歯牙にもかけぬ」
相手を問題にせず、無視すること

「画竜点睛を欠く」
物事を完成させるための肝心な仕上げが抜けていること

「百年河清を俟つ」
長い年月を待っても実現の見込みがないこと

「石の上にも三年」
つらくてもがまんして続ければ、いつかはむくわれるということ

「縁の下の力持ち」
人の目につかないところで、ほかの人のために力をつくすこと。また、その人

「習うより慣れよ」
人から教わるより、自分で何度もやって慣れるほうが身につくということ

「良薬は口に苦し」
自分にとってためになる忠告は、聞くのがつらいものだ

「虎の威を借る狐」
他人の権力を利用して、いばり散らす者のたとえ

「覆水盆に返らず」
一度起きてしまったことは、二度と元には戻らない

「親の心子知らず」
親が子を思う深い愛情を、子は理解せず勝手な振る舞いをすること

「豆腐にかすがい」
やわらかい豆腐にかすがいを打ってもきかないように、手ごたえがなく効き目がないこと

「門前雀羅を張る」
訪ねてくる人がなく、家がひっそりと寂れていること

ことわざ 一覧表（早見表）

小学生〜中学・大人／覚えておきたいことわざと意味のまとめ

「隣の芝生は青い」
他人のものは自分のものより良く見えるものだ

「雨垂れ石を穿つ」
小さな力でも、根気よく続ければ、大きなことができるということ

「魚心あれば水心」
相手が好意を示せば、こちらも好意で応じる気持ちになるということ

「烏なき里の蝙蝠」
優れた者がいない場所では、つまらない者が威張ること

「三つ子の魂百まで」
幼い頃の性格や性質は、年をとっても変わらない

「亀の甲より年の劫」
長年積み重ねた経験や知恵は、何物にも代えがたい価値があること

「人の噂も七十五日」
世間の噂は長続きするものではなく、しばらくすれば自然に忘れ去られるということ

「人を呪わば穴二つ」
人に害を与えれば、自分も同じ報いを受けることになるということ

「出る杭は打たれる」
才能があったり目立ったりする人は、とかく人から憎まれたり邪魔されたりする

「初心忘るべからず」
物事を始めた時の謙虚で真剣な気持ちを忘れてはならない

「口も八丁手も八丁」
口先だけでなく、実行する能力も優れていること

「国破れて山河在り」
戦乱などで国は滅びても、自然の山川は変わらずに残っていること

「天高く馬肥ゆる秋」
空が澄み渡り、収穫の秋で食欲が増す過ごしやすい季節のこと

「安物買いの銭失い」
安いものを買うと、すぐにこわれたりして、かえって損をするということ

「帯に短し襷に長し」
中途半端で、どちらの用途にも合わず役に立たないこと

「弘法は筆を選ばず」
名人は道具の良し悪しにこだわらず、立派な仕事をするということ

「捕らぬ狸の皮算用」
まだ手に入っていない利益をあてにして計画を立てること

「早起きは三文の徳」
朝早く起きると、健康によかったり少しだけ良いことがあるということ

「木を見て森を見ず」
目先の細かい部分に気を取られて、全体を見失うこと

「烏に反哺の孝あり」
子が成長して親の恩に報いること

「猿も木から落ちる」
その道に優れた名人でも、時には失敗することがある

「百日の説法屁一つ」
長い間の努力や修行も、ちょっとした失敗で台無しになること

「盗人にも三分の理」
どんなに悪いことをした人にも、それなりの言い分はあるということ

「石橋を叩いて渡る」
用心の上に用心を重ねて行動すること

「立つ鳥跡を濁さず」
立ち去る時は、後始末をきちんとしておくべきだ

「老いては子に従え」
年をとったら、何事も子供の意見に従うほうが円満にいく

「雀の千声鶴の一声」
凡人の多くの言葉よりも、優れた人物の一言の方が価値があるということ

「雨降って地固まる」
揉め事のあと、かえって前よりも良い状態になること

「頭隠して尻隠さず」
悪事や欠点の一部を隠したつもりで、全体が隠れていないこと

「鬼の居ぬ間に洗濯」
怖い人がいない間に、のびのびとくつろぐこと

「魚の目に水見えず」
あまりに身近な存在であるために、その大切さや存在に気づかないこと

「鶴は千年亀は万年」
鶴は千年、亀は万年生きると言われることから、長生きでめでたいことのたとえ

「一を聞いて十を知る」
少し聞いただけで全体を理解するほど賢いこと

「人の褌で相撲を取る」
他人の物や力を利用して、自分の目的を達すること

ことわざ 一覧表（早見表）

小学生～中学・大人／覚えておきたいことわざと意味のまとめ

「人間到る処青山あり」
世の中は広く、どこにでも骨を埋める場所はあるので、大志を抱いて外に出るべきだ

「備えあれば憂いなし」
日頃から準備を整えておけば、いざという時にも心配や不安がないこと

「先んずれば人を制す」
人より先に物事を行えば、主導権を握って有利に立てるということ

「千里の道も一歩から」
どんな大きな物事も、まずは小さな一歩から始まるということ

「去る者は日々に疎し」
親しかった人も、はなれてしまうと、だんだん忘れられていくということ

「大山鳴動して鼠一匹」
大騒ぎした割には、結果がとても小さくつまらないこと

「暑さ寒さも彼岸まで」
夏の暑さも冬の寒さも、彼岸のころには和らいで、過ごしやすくなるということ

「枯れ木も山の賑わい」
つまらないものでも、ないよりはあったほうがましである

「毒を食らわば皿まで」
一度悪事に手を染めたら、最後まで徹底的にやるしかない

「水は方円の器に随う」
人は、つき合う友達やまわりの様子しだいで、よくも悪くもなるということ

「水清ければ魚棲まず」
あまりに清廉潔白すぎると、かえって人から敬遠されて仲間が集まらない

「治に居て乱を忘れず」
平和な時でも、いつか起こるかもしれない災難に備えて油断してはならない

「渡る世間に鬼はない」
世の中には冷酷な人ばかりではなく、親切な人もいるものだ

「玉磨かざれば光無し」
人は努力や修養を積まなければ、優れた素質を持っていても立派な人物にはなれない

「百害あって一利なし」
害ばかり多くて、少しも利益がないこと

「百聞は一見にしかず」
人から何度も聞くよりも、一度自分の目で見るほうが確かである

「目くそ鼻くそを笑う」
自分も大した欠点があるのに、他人の欠点を笑うこと

「禍を転じて福となす」
災難に遭ったことを利用して、かえって良い結果を生み出す

「笑う門には福来たる」
いつも明るく笑っている人の家には、自然と幸福がやってくる

「聞いて極楽見て地獄」
話に聞くのと実際に見るのとでは、大きなちがいがあること

「背に腹はかえられぬ」
大事なことのためには、ほかのことをがまんするのもしかたがないということ

「能ある鷹は爪を隠す」
実力のある人は、それをひけらかしたりしないこと

「蓼食う虫も好き好き」
人の好みはさまざまであり、他人がとやかく言うことではないこと

「足もとから鳥が立つ」
身近なところで思いがけないことが急に起こること。また、急に思い立って、あわてて物事を始めること

「鉄は熱いうちに打て」
物事は勢いのあるうちに、あるいは影響を受けやすい時期に処理すべきだ

「陰徳あれば陽報あり」
人知れず良い行いをしていれば、いつか必ず良い報いがある

「雀百まで踊り忘れず」
幼い頃に身についた習慣や癖は、年をとってもなかなか抜けない

「鬼の首を取ったよう」
たいしたことでもないのに、大手柄を立てたかのように得意になっている様子

「一寸の虫にも五分の魂」
どんなに小さく弱い者でも、それ相応の意地や考えがあるから侮ってはいけない

「一将功成りて万骨枯る」
一人の将軍の栄光の陰には、多くの兵士の犠牲があること

「三人寄れば文殊の知恵」
凡人であっても、三人集まって相談すれば素晴らしい知恵が浮かぶものだ

「君子危うきに近寄らず」
教養があり徳の高い人は、自分から危険な場所には近づかないものだ

「塵も積もれば山となる」
わずかなものでも、おろそかにせず積み重ねれば大きなものになる

「夕立は馬の背を分ける」
夕立は、すぐ近くでも、降る所と降らない所がはっきり分かれるということ

「好きこそ物の上手なれ」
好きなことに対しては熱心に取り組むので、自然と上達するものだ

「待てば海路の日和あり」
あせらずに待っていれば、やがてよい機会がめぐってくるということ

「急いては事を仕損ずる」
急いで物事をすると、かえって失敗しやすいので、落ち着いてやるのがよいということ

「悪貨は良貨を駆逐する」
質の悪いものが流通すると、質の良いものが市場から姿を消してしまうこと

「情けは人のためならず」
人に親切にすれば、巡り巡って自分に良い報いが返ってくる

「明日は明日の風が吹く」
明日のことは明日になればなるようになるので、今悩んでも仕方がないということ

「朱に交われば赤くなる」
人は付き合う仲間によって、良くも悪くも感化されるものだ

「案ずるより産むが易し」
物事は、始める前にあれこれ心配するより、実際にやってみると案外たやすいものだということ

「物言えば唇寒し秋の風」
人の悪口や、言わなくてもよいことを言うと、わざわいを招くということ

「犬も歩けば棒に当たる」
何かをしようと行動すれば、思わぬ幸運や災難に出会うことがある

「狡兎死して走狗烹らる」
目的を達成して不要になると、功労者も捨てられるというたとえ

「瓜の蔓に茄子はならぬ」
子は親に似るもので、平凡な親から特別すぐれた子は生まれないということ

「生兵法は大怪我のもと」
中途半端な知識や技術で物事を行うと、かえって失敗や大きな損害を招くこと

「目は口ほどに物を言う」
言葉で言わなくても、目つきで感情や意志が十分に伝わる

「秋茄子は嫁に食わすな」
秋のなすはとてもおいしいので、嫁には食べさせるなという、しゅうとめの意地悪をいったことば。体を冷やすので大切な嫁に食べさせるな、という別の説もある

「藪をつついて蛇を出す」
余計なことをしたために、かえって災いを招いてしまうこと

「袖振り合うも他生の縁」
見知らぬ人と袖が触れ合うようなわずかなことでも、前世からの深い因縁があるということ

「親しき仲にも礼儀あり」
どんなに親しい間柄でも、守るべき礼儀があるということ

「論語読みの論語知らず」
本に書いてあることを知識として知っているだけで、それを自分の行いに生かせないこと

「郷に入っては郷に従え」
その土地や集団の習慣やルールには、自分を合わせていくべきだ

「長いものには巻かれろ」
勢力のある大きな相手には、逆らわずに従ったほうが得策だということ

「飛んで火に入る夏の虫」
自分から進んで災難や危険の中に飛び込んでいくこと

「飼い犬に手を噛まれる」
日頃可愛がって世話をしていた者から裏切られたり、害を加えられたりすること

「鬼が出るか蛇が出るか」
どんな恐ろしいものや災難が現れるか分からないこと

「鴨が葱を背負って来る」
こちらに都合のよい相手が、さらに都合のよいものを持ってやって来ること

「鹿を追う者は山を見ず」
目先の利益に心を奪われると、全体が見えなくなること

「三十六計逃げるに如かず」
形勢が不利なときは、戦わずに逃げて身を守るのが最善の策である

「下手の考え休むに似たり」
能力のない者がいくら考えても良い案は浮かばず、休んでいるのと同じである

「二度あることは三度ある」
一度あったことは二度、三度と繰り返されることが多いということ

「井の中の蛙大海を知らず」
狭い世界に閉じこもっていると、世の中の広さを知らないままになる

「可愛い子には旅をさせよ」
子供を本当に愛しているなら、甘やかさず苦労を経験させるべきだ

「壁に耳あり障子に目あり」
秘密は漏れやすいので、言動には十分注意すべきだ

「天は自ら助くる者を助く」
自分で努力する人を、天は成功へ導いてくれる

「小人閑居して不善をなす」
徳のない者は暇ができると、とかく悪いことをしがちである

ことわざ 一覧表（早見表）

小学生〜中学・大人／覚えておきたいことわざと意味のまとめ

「泣く子と地頭には勝てぬ」
道理の通じない相手や権力者には、何を言っても無駄なので従うしかないということ

「泥棒を捕らえて縄を綯う」
事が起きてから慌てて準備をすること

「火のない所に煙は立たぬ」
噂が立つにはそれなりの理由があるはずだ

「牛に引かれて善光寺参り」
他の誘いや偶然のきっかけによって、思いがけず良い方向へ導かれること

「老いてますます盛んなり」
年をとっても元気がおとろえず、若いころよりもますます意気さかんであること

「船頭多くして船山に登る」
指図する人が多すぎて、物事がとんでもない方向に進んでしまうこと

「雉も鳴かずば撃たれまい」
余計なことを言わなければ災いを招かずに済むということ

「風が吹けば桶屋が儲かる」
一見関係なさそうなことが、意外なところで影響し合うこと

「鳶に油揚げをさらわれる」
油断している隙に、自分のものを横取りされること

「人の振り見て我が振り直せ」
他人の言動を見て、自分の行いを反省し改めること

「人事を尽くして天命を待つ」
自分ができる限りの努力をした上で、あとは運命に任せること

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」
苦しい経験も過ぎ去ってしまえば、その苦しさを忘れてしまうこと

「天網恢恢疎にして漏らさず」
天の張る網は広大で目が粗いようだが、悪人は決して逃さない

「捨てる神あれば拾う神あり」
ある人に見捨てられても、他の誰かが助けてくれるものだ

「渇しても盗泉の水を飲まず」
どんなに苦しい状況でも、不正な手段や道義に反する行いは決してしないこと

「無理が通れば道理引っ込む」
理屈に合わないことがまかり通るようになると、正しい道理が行われなくなる

「門前の小僧習わぬ経を読む」
いつも見聞きしていると、自然と知識が身につくということ

「骨折り損のくたびれもうけ」
苦労したのに何の成果もなく、つかれただけであること

「二兎を追う者は一兎をも得ず」
欲を出して同時に二つのことをしようとすると、どちらも失敗する

「来年のことを言えば鬼が笑う」
先のことはわからないので、あれこれ言ってもしかたがないということ

「禍福はあざなえる縄のごとし」
幸福と不幸は交互にやってくるもので、予測できない

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」
危険を冒さなければ、大きな成果は得られない

「青は藍より出でて藍より青し」
弟子が師匠よりも優れていること

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」
小人物には大人物の大きな志や考えは理解できないということ

「鶏口となるも牛後となるなかれ」
大きな組織の末端にいるより、小さな組織の長であるほうが良い

「朝に紅顔ありて夕べに白骨となる」
この世は移り変わりやすく、人の命がいつ終わるかはだれにもわからないということ

「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」
知らないことを聞くのはその場限りの恥だが、聞かないでいると一生恥をかくことになる

「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」
敵と自分の実力を正しく把握していれば、何度戦っても負けることはないということ